

川崎市における授業力向上をめざした ICT 活用研修

田中啓介（川崎市立有馬小学校）・椎名美由紀（川崎市総合教育センター）
 ・草柳譲治（川崎市総合教育センター）

概要：川崎市では川崎市総合教育センター主催で ICT を活用した授業力向上を目指す研修を平成 27 年度から行っている。タブレット PC 等の ICT の活用法だけではなく、国語科や社会科といった教科指導の中に「情報活用能力の育成」の視点や活動の取り入れ方なども含めた模擬授業を体験してもらった研修についての報告を行う。

キーワード：情報活用能力，教員研修，授業力向上，タブレット端末，ICT 活用

1 はじめに

川崎市では、総合教育センターなどが主催となり数多くの研修会が開催されている。今回は昨年度、今年度と行われた特設研修「授業力向上（ICT 活用）」についての報告を講師（研究会常任委員）として参加した立場から行う。（図 1）

実物投影機や 2000 台以上のタブレット端末が配備されている。（表 2）

校種	学校数	配備台数
小学校(10 台)	113 校	1130 台
中学校(20 台)	52 校	1040 台

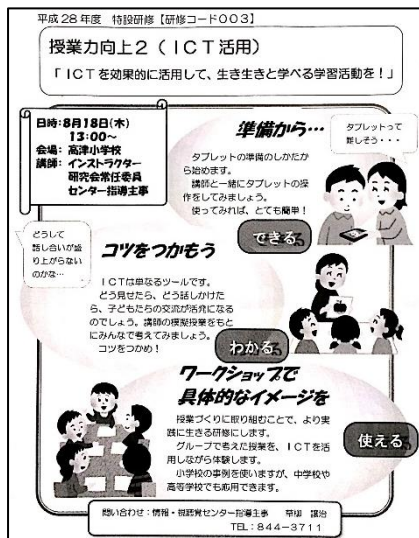
【表 2 タブレット端末の配備台数】

当初は小学校の教員を受講者として想定していたが、希望者の中には中学校や特別支援学校の教員の参加もあった。（表 3）

	小学校	中学校	支援校	合計
27 年度	28 名	4 名	2 名	34 名
28 年度	25 名	8 名	1 名	34 名

【表 3 校種別参加人数】

受講者が実際に授業を行う環境で研修することを優先と考え、市内の小学校の普通教室を会場とした。また、タブレット端末の台数から 1 台あたり、4~5 人で使用するという実際の授業と同じような人数で研修会を行った。



【図 1 市内各校に配布された研修会のチラシ】

2 研修会の概要

本研修会のねらいは、タブレット端末を中心とした ICT の活用を考えながら、授業力向上を目指すものである。

川崎市では各教室に 50 インチ TV モニタ，ノート型 PC が常設され、学校規模に応じた台数の

3 平成 27 年度の研修会

(1) 研修会の実際

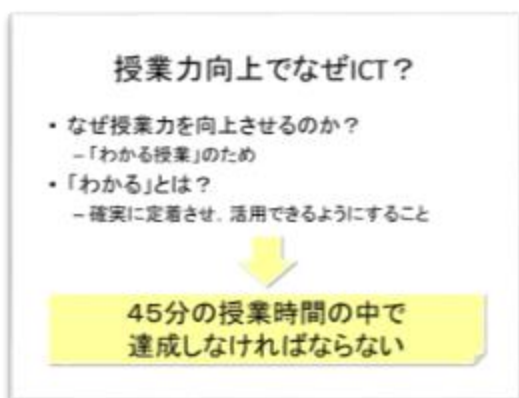
受講者の多くは、個人でスマートフォンやタブレット端末に触れた経験を持っていたが、学校に配備されたタブレット端末については初めて触れたという人が多かった。

当日の流れは以下の通りである。

1. 基本操作の説明（インストラクター）
2. 模擬授業①【社会科】(情報研常任委員)
3. 模擬授業②【算数科】(算数研常任委員)
4. 授業づくりワークショップ
5. まとめ（指導主事）

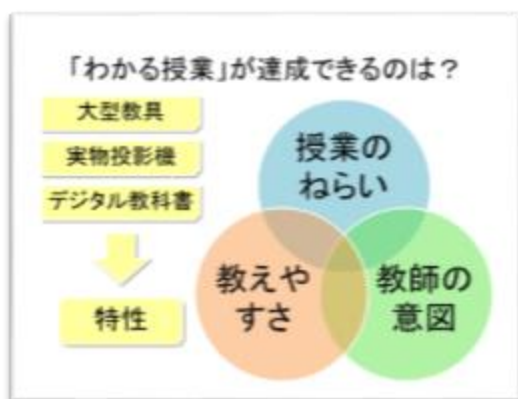
模擬授業①【社会科】では、この研修が授業力向上をめあてとしていることを踏まえ、単にタブレット端末の機器操作体験で終わらないように流れを考えた。

わたしたち教員は子供たちに「わかる授業」を提供することが大事な使命である。そして、それを決められた授業時間（小学校では45分）で達成しなければならない。（図4）



【図4 H27 プレゼンテーション①】

したがって、授業のねらい、教師の意図、教えやすさとメディアの特性を考えて、授業を作り上げていく必要がある。（図5）

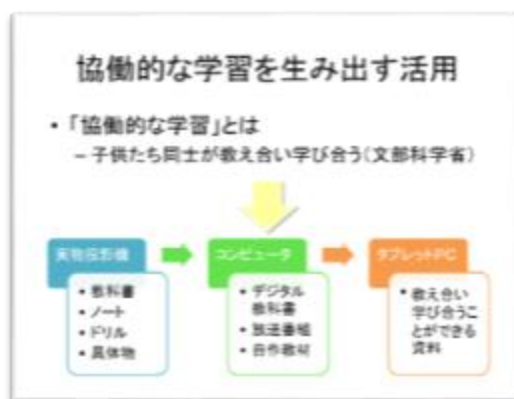


【図5 H27 プレゼンテーション②】

さらに、グループに1台程度の台数で整備されている本市の現状からタブレット端末を協働

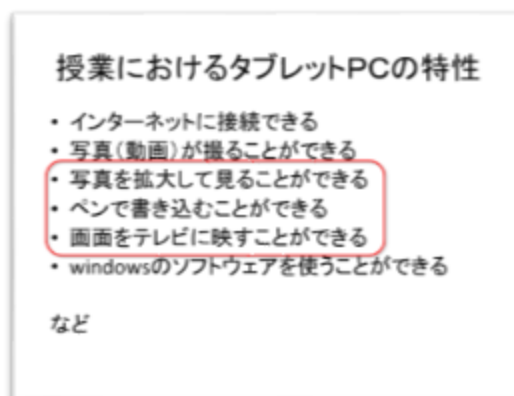
的な学習場面で用いることが望ましいとした。

（図6）



【図6 H27 プレゼンテーション③】

今回の社会科の模擬授業では、タブレット端末の特性の中から、「写真の拡大」「ペンによる書き込み」「TV モニタへの転送」という3つを利用することを伝えた。（図7）



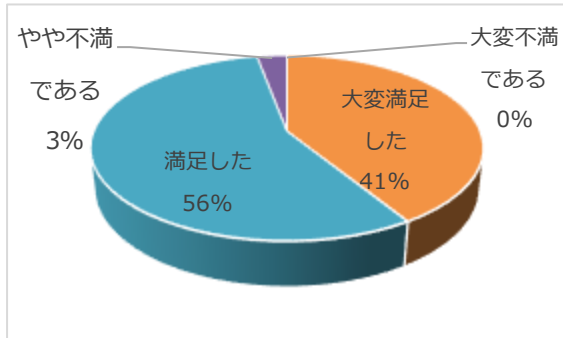
【図7 H27 プレゼンテーション④】

実際の模擬授業では、「小学社会6上(教育出版) P.38「武士の館(想像図)」の図を提示した。最初は、図全体を俯瞰的に読み取らせるために「何が見えますか」と発問し、その後で、「どんな人がいますか」「どんな建物がありますか」と細かく読み取る発問をした。すると、図を細かく見るためにタブレット端末に表示されている図を拡大したり、見つけたものに丸印をつけたりしながら、自然とグループの中で話し合う姿が見られるようになった。受講者はその姿と自分の教室での子供たちの様子を思い浮かべて、タブレット端末の活用のイメージを持つことが出来たようだった。

(2) 研修会のふり返り

会場の狭さやタブレット端末の台数など、環境面での課題は残ったが、受講者からのアンケートでは、よい評価を受けることが出来た。

(グラフ 8, 表 9)



【グラフ 8 受講者アンケート結果 (H27)】

・初めてタブレットを使った授業について考え勉強しました。授業を分かりやすく、活動的にするために生かしていきたいと思いました。

・初めてタブレットを使用しましたが、基礎的なことから、すぐに授業で実践できる内容まで研修でき、とても有意義でした。

・「教えやすさが、わかりやすさ」という言葉が印象的でした。まずは自分が経験をつんで授業に生かしていきたいと思います。

・「日常で使ってみる」ことが大切だと思うので、とにかく使ってみて、また機会があれば参加したいと思います。

・ざっくりとした研修で吸収することが少なかった。

【表 9 主な記述回答 (H27)】

4 平成 28 年度の研修会

(1) 研修会の実際

今年度も前回と同じ学校で開催した。ほとんどの参加者が初めての参加者で、タブレット端末の使用経験も無い人が多かった。

当日の流れは以下の通りである。

1. 研修会の概要 (指導主事)
2. 基本操作の説明 (インストラクター)

3. 模擬授業【国語科】他(情報研常任委員)

4. 授業づくりワークショップ

5. まとめ (指導主事)

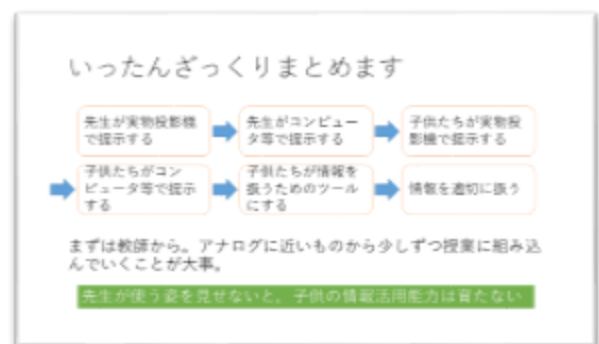
今年度から10年経験者研修の1つとして選択することが出来るようになり、13名が受講した。

今年度もタブレット端末での授業経験が無い人が多かったので、模擬授業では、実物投影機やノート型PCなども含めたICT活用例などを紹介した。7つの事例を「教師によるICT活用」「児童によるICT活用」「情報活用の実践力を育成する場面」と位置付けた。(図 10)



【図 10 H28 プレゼンテーション①】

昨年度出された教育課程特別部会の論点整理では、「特にこれからの時代に求められる資質・能力」として、情報活用能力が挙げられている。子供たちの情報活用能力を育成するためには、いきなりタブレット端末を子供たちに手渡すのではなく、「教師によるICT活用」から始めることが大切である。また、教師は無理にタブレット端末を使うのではなく、アナログに近い感覚で活用することができる実物投影機から段階的に自分の授業スタイルの中に組み込んで活用することが大切であるとまとめた。(図 11)



【図 11 H28 プレゼンテーション①】

模擬授業では、5年生の国語「想像力のスイッチを入れよう（教育出版）」で行った。タブレット端末を使って例文にアンダーラインを引いて、クラスで共有するという使い方をした。アナログでも同じような授業は可能であるが、子供たちが協働的に活動する時にはタブレット端末を使った方が短時間で進めることが出来るということを受講者が実感できたようだった。

最後は、昨年度と同様に「授業力向上とは子供たちにわかりやすい授業を提供すること」とし、そのためには、教師が操作に戸惑うことなく、スムーズに授業ができるように、段階を迫って、少しずつ自分の授業スタイルに組み込んでいくことを再確認した。（図12）

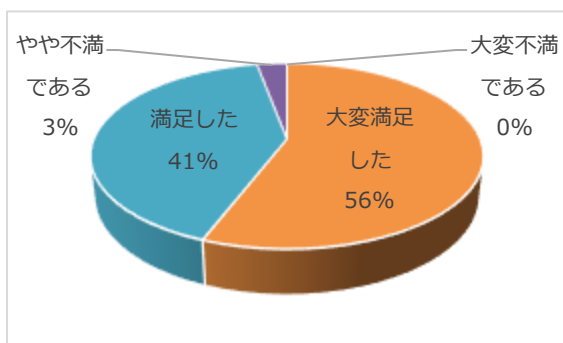


【図12 H28 プレゼンテーション②】

その後、受講者がタブレット端末を使って授業づくりを行った。どのグループも「教師によるICT活用」を意識した授業を提案していた。

（2）研修会のふり返り

昨年度の反省から授業づくりワークショップは2つの教室を使ったので、狭さの問題は解消されたが、中学校の教員からは中学校向けの研修を要望する声が聞かれた。（グラフ13、表14）



【グラフ13 受講者アンケート結果（H28）】

<ul style="list-style-type: none"> ・タブレットの効果的な活用によって、“わかりやすい授業”“わかる授業”につながるなど実感できました。
<ul style="list-style-type: none"> ・ICTを使う場面、「どこで使うと効果的か考える」きっかけになりました。
<ul style="list-style-type: none"> ・限られた時間を有効に使いつつ、授業でつけた力をつける。そのためにICTはとても有効だと感じました。
<ul style="list-style-type: none"> ・模擬授業を考える活動もあり、とても参考になった。
<ul style="list-style-type: none"> ・深まらなかった。活用するための教師側の知識、技能が必要だと感じました。

【表14 主な記述回答（H28）】

5 まとめ

授業力向上（ICT活用）という研修は、受講者からのアンケート評価が高いことがわかる。特に2年目である今年度は半数以上が「大変満足した」と答えている。

ただ、受講者のほとんどはタブレット端末での授業経験が無い中で、この研修を希望しているという点は気になる点である。

潜在的にタブレット端末を使ってみたいという気持ちの教員が増えていることは、教員のICT活用がさらに推進されていくことであり、望ましいことである。しかしながら、受講者の中にICTを活用すれば授業が変わるという期待や誤解を持っている人もいただろう。

あくまでも教師が何を発問するか、子供たちにどのような活動をさせるかということをしつかりと考えること、そして、そこにICTをどのように組み込むことが効果的であるかということを考えることこそが大事なことであり、教師としての授業力を向上させるというねらいを外さないように研修の中で伝え続ける必要があると考える。